施工者に幸あれ 第40回

構造家・多田脩二は明日へ化ける

朝倉幸子◉TH-1
illustration：Taco◉Switch・エンタテインメント

■松井源吾賞

構造家の多田脩二さんは，佐々木睦朗構造計画研究所在職の9年間，佐々木睦朗先生に，大変厳しくシカラレテ仕込まれたとか。「入所当時は所員が一人。多くの著名建築家と仕事をさせていただき，事務所とともに大きくしてもらい，建築の面白さを知りました」。佐々木先生への感謝は，今に続いています。

2002年に，多田脩二構造設計事務所を設立して，最初の仕事だった「中国木材名古屋事務所」（設計：福島加津也+冨永祥子）で，第16回JSCA賞作品賞と2005年松井源吾賞を受賞，という快挙。建築家とコンペの段階から密にかかわり，また，学生時代にお世話になった日本大学斎藤研究室の協力も得て，構造設計をされたという。

ソフトで真摯な話し方と対応には人を和ませるものがある。建築家から信頼を得る構造家に，仕事の依頼が，引きもきらないのは当然かもしれない。

■雑誌の力

今，活躍する多くの構造家を育ててきた，斎藤公男先生が監修された『建築文化』1990年11月号の特集，「建築の構造デザイン」を読んだことが，構造に目を向ける第一歩だった。念願叶って，斎藤公男先生の研究室へ入ったのは，大学院生になってから。日本を代表する建築家と構造家の対談，作品の紹介，論文，構造デザインの歩みなどが満載された特集を，バイブルのように今でも時々開くという。「構造を通してスゴイ建築ができる！」と，多田脩二先生に示唆した功績だけを見ても，雑誌が一過性のものではないことを，証明しているのではないかと思う。

実は，その出版社には覇志堂（建築技術社長・橋戸）も，在籍していた。かつ，その号に編集者として名を連ねているのが，「施工者に幸あれ」を担当している編集者の高木さん。この時すでに構造にかかわっていたとは，巡り合わせの妙ですね。

■打放しの自邸

都内に，半地下が事務所になっているRC造の住まいを建てられた。「自分が設計者を選ぶなんてできないです。選んだのはセシュです，施主」。

夫人と子供さんたちが大ファンという，建築家の新関謙一郎先生が設計者です。施主の夫人は，事務所の仕事にはかかわっていないそう。が，快活でチャーミングなお人柄は，同じ屋根の下で働く所員さんたちをも，元気にしているようです。

「構造では多少の冒険をしています。無理しているところは，ヒビが入るとわかりましたよ」と，多田先生は技術者魂をのぞかせながらも，屈託がない。時間の経過で，もっともっと，ご一家の色に染まりそうな活き活きとした住宅です。

■教職と実務との狭間

千葉工業大学の准教授を拝命して，の悩みもある。実務との時間配分がその一つ。学生の構造への興味を，どこまで引っ張っていけるかも課題。「今の自分は中途半端で，パワー不足で，行き詰まり……」と表現した。また，学生の進路や就職先に対しても，「創造性のある仕事の方が，やりがいがあるよ」と力説しても通じないという，ジレンマがあるようです。

斎藤公男先生監修の特集に触発され教えを請い，佐々木睦朗先生に実践を学び，故山本学治先生の本に感銘してきた構造家・多田脩二さん。真剣に悩み，模索するところから始める人のようだ。そして道を見出すと，突進し，極めるまで続ける力をもつ。見続けてきた覇志堂から「これからどういうふうに化けて行くか，期待しています」と絶大なエールが。